

クモヘリカメムシの発生が多くなっています

～斑点米発生防止には乳熟期の防除が重要です～

[現在の発生状況]

- ① 7月下旬現在、本県の斑点米カメムシ類主要種であるクモヘリカメムシ（写真1,2）の水田内におけるすくい取り虫数は平年よりやや多く、発生地点率は平年並である。特に、県央、鹿行および県南地域で発生が多い。（表1）
- ② 8月1日現在、有効積算温度から計算したクモヘリカメムシの産卵開始時期は、平年よりやや早い。



写真1 クモヘリカメムシ成虫

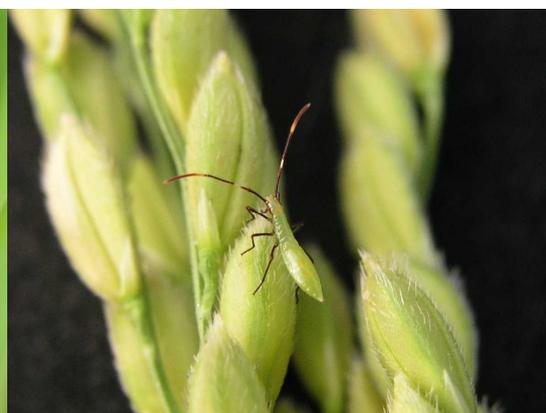


写真2 クモヘリカメムシ幼虫

表1 水田におけるクモヘリカメムシの地域別生息状況（平成28年7月下旬調査）

地域（調査地点数）	すくい取り虫数（頭/10回振り）			発生地点率（％）		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾
県北（8）	0	0.11	8-11	0	13	8-11
県央（15）	0.50	0.20	2	7	13	8
鹿行（6）	0.17	0.38	2-3	17	12	2-7
県南（19）	0.21	0.04	2	11	1	1
県西（9）	0	0.09	5-11	0	4	5-11
全県（57）	0.22	0.14	2	7	8	4

1) 平年:平成18～27年までの10年間の平均値を示す。

2) 順位:過去11年間における本年値の順位を示す(8-11は8位から11位まで同じ数値であることを表す)。

[防除対策]

- ① 水田内および水田周辺のイネ科雑草やカヤツリグサ科雑草は、斑点米カメムシ類を誘引するので除草に努める。ただし、水田周辺の除草は水稻の出穂期近くに行くと、斑点米カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、出穂期2週間前までに終わらせる。
- ② 周辺より出穂の早い水田では、成虫の飛来が集中する恐れがあるので注意する。また、収穫の遅い水田では、8月中旬以降に新成虫の飛来により密度が高まることがあるので注意する。
- ③ クモヘリカメムシ成虫を対象とした防除適期は、穂揃期である。穂揃期に成虫を確認した場合は防除を実施する。
- ④ クモヘリカメムシ幼虫を対象とした防除適期は、出穂10～15日後頃（乳熟期）である。斑点米の発生を防止するためには、この時期の幼虫密度を低下させることが重要であり、乳熟期以降の幼虫密度が高いと斑点米の発生量が多くなる*。
- ⑤ 防除薬剤は表2を参考にする。防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。また、周辺作物（特に早生品種を作付している水田がある場合）への飛散に注意する。

※ 乳熟期から糊熟期に捕虫網（直径 36cm）を用いた 20 回振りすくい取り調査で幼虫が 3 頭以上確認される水田では、玄米等級が 2 等以下となる確率が高い。

表2 稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤（平成 28 年 7 月 20 日現在）

薬剤名	使用方法	希釈倍数	収穫前日数	本剤の使用回数	有効成分	IRACコード ¹⁾
アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	散布	2000 倍	7 日	3回以内	ジノテフラン	4A
キラップフロアブル	散布	1000～2000 倍	14 日	2回以内	エチプロール	2B
MR. ジョーカーEW	散布	2000 倍	14 日	2回以内	シラフルオフエン	3A

1) 殺虫剤抵抗性対策委員会（IRAC）により、殺虫剤の有効成分を作用機構により分類し、コード化したもの。IRAC 作用機構分類については、農薬工業会ホームページの農薬情報局「農薬の作用機構分類」を参照。

注) 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認する。また、育苗箱施薬、航空防除を行っている場合は、本剤の使用回数ならびに有効成分の総使用回数に十分注意する。